まとめ・・ソシュール言語学について

ソシュールの言語論、その言語使用の中の人間理解について、人間は自然生物から社会文化性への移行過程にあると言うレヴィ＝ストロースの視点を重ねるならば、言語の二つの性質（線状性と恣意性)、言語の通時・共時変換、そして言語の体系の間に、ひとつの循環構造が浮かび上がる。

ソシュールの言語論においては、言語使用における人間活動は、その（身体運動による）言語音声音声と、（概念性・精神運動による）言語的意味の創出の双方が、一体的に絆づけられている。

それはレヴィ＝ストロースが言うところの、人間存在は自然生物から社会文化への移行、その過程にあると言う構図に重なるがごとくに、失われる事のない自然生物性（身体 運動・発声運動）において線状的に配列される「音素配列―音」、そして深化拡大中の社会文化性（精神 運動・概念化作用）において恣意に括りとられる言語的な「意味」、その「音」と 「意味」が一体的に絆づけられた「シーニョ」の定義として理解されよう。

こうした言語の意味の単位、「シーニョ」の定義自体が、レヴィ＝ストロースの語る人間の存在様式に重なり、「言語的意味」は、**「恣意性」**・時空を超える類推作用をもって**精神運動において**括り取られ、それに対して「言語音声」は、発声過程の**「線状性」**、一筋に配列され、音素を配列する発声・**身体運動の秩序において**進むという、その**言語の二つの性質（恣意性と線状性） が一体的に重なりあいながら進む言語表象過程であり、人間の自然生物性（身体性）から社会文化性（精神性） への移行の過程のごとくに、それをそのままなぞっている**と思われた。

人類は言語の意味の単位 「シーニョ」を括りだし、それら各「シーニョ」を自由・恣意 に選択し、線状性の拘束下で結合しつつ、ディスクールを、言語的コミュニュケーションを達成し、交わしつつ、社会文化の状態へと移行を進めた存在ではないのだろうか。

「音」の側からも「意味」の側からも、「シーニョ」の構成は絆つけられている。ソシュ ールの**「第一の恣意性」**は、言語的コミュニュケーション、言語使用、その実践課程の要諦と理解される。「音」と「意味」が一体的に絆づけられる「シーニョ」の図、その外側に示された矢印の双方向性は、聞き手にとっては「音」から「意味」へ、話し手にとっては「意味」から「音」へ、その双方が「ランガージュ」と言う同じ精神機能を駆動して動きあう言語的コミュニュケーション、その構造を示しており、その言語音の揺らぎにおいて、言語の意味の揺らぎが引き続き、言語の意味の創出過程が想定され得ると理解される。

（そこで言語の表象は、近代的な自我作用・閉じられた個人の意識活動の表象、その実現と言うよりは、自然生物性（情動性）を抱えつつ動く、情動性、集団内交互作用、消える事ない命【自己維持と自己再生産】の要請の中で、互いのランガージュ（言語能力・精神機能）の重ね合い関係において、言語的な意味と音を「揺らし合い・重ね合う」、恣意なる母国語集団的なコミュニュケーション活動、音声言語使用過程として想定されよう。）

ソシュールの言語論について

１．Saussure の言語論の概要

言語名称目録観の否定・「実体概念から関係概念へ」

2-**方法論について**

近代的自我作用における意識作用の展開課程を想定したうえで、言語の構造を解明しようとしている。ラング・パロール・ランガージュという三概念を創出し、個人の精神、身体活動の双方から追跡する言語使用、その流れを想定し、その中で人間の精神身体活動の重なりあいとしての言語使用を、時間の流れ（線状性）において追跡しつつ捉えようとしている。

言語使用を説明する 3 概念

その効果-1 ランガージュ　言語使用の主体における精神機能（概念化作用）を焦点化する。

-2 パロール　言語使用の現場での身体運動、その動態としての言語音声であり、その次々と発語発声する音素の配列関係を追跡可能ならしめる構成である。

-3 ラング　言語の体系の視点から、社会集団の関与・社会制度的性質を含意する。

「パロール」の提示は、言語使用の流れ（時間性・線状性）の中で、人間の活動を「精神機能と身体機能」の双方としつつ、その（連動態・重合態）としての言語使用、時の流れに従いつつの実践課程を、身体運動性（発語作用）に焦点づけて追跡する事を可能にしている。

【しかしこの三概念は人類の**個体としての言語使用**（集団性は捨象）場面を前提にする】

3-**言語記号論の提示とその射程：**

言語的意味の単位・**記号としての「シーニョ」**

「シーニョ」：言語使用、言語表象過程は、人間の観念作用（意味・精神運動）と発声運動（身体運動）の重合的活動としての展開過程として理解されるが、その中で「シーニョ」は言語音声「音」と「意味」の一体的構造として、「言語的意味の単位」とされる。

「シーニョ」は言語音の基本単位（音素）の配列集合として、音素の配列関係の差異、その在りようによって、互いの差異関係によって意味（音響イメージ）を孕むところの、音素を基本単位とする記号的構成をなしているとされる。人間の概念化・抽象化する精神機能が、

その「音響イメージ」を「言語的意味」として湧出せしめるところの、言語的意味を抱えた「単位」といえよう。

・**パロール（言語音声）**：言語音声は、12 対の音素の示差標識（弁別特性）、その配列関係による音響イメージを抱えつつ、そうした「シーニョ」の連鎖であり、言語表象は「シーニョ」の選択と結合を進めつつの、音素配列を重ねつつの発声過程といえよう。その音響イメージの生成とそのゆらぎの中で進行する言語表象の実践課程としてのパロールは、はその発声過程において、言語的意味の新たな括り出し、創出の可能性を孕みつつの、個人の言語使用、その実践課程といえよう。

言語的意味：言語の意味の単位「シーニョ」は、音素の配列集合として、その差異をもって 音響イメージを醸成して、言語的な意味を湧出するとして想定される。この言語使用の過程は、言語音の基本単位音素の配列関係によって、その差異が醸成する音響イメージを、言語的意味に繋げる、繋がるということとして想定される。「シーニョ」は、言語音の 12 対の音素の示唆標識の配列関係の差異において、その記号的構成において、現前をこえて無限に飛翔する人間の精神機能の自由度（恣意性）を捕捉し得る構成において、言語的意味は音響イメージの揺れとともに動く事が想定されている。

言語的意味は、それぞれの生活世界の「解釈」と言うべき「差異の二項対立関係」を構成し、その様式をもって、互いの意味を「音素の配列関係」「音響イメージ」を抱えた単位「シーニョ」として、差異の二項対立関係から括り出されるとされる。ラングはそれら「シーニョ」を「群化（グルーピング）」して抱える「記憶の倉庫」とされ、各「シーニョ」はその意味をラングの体系において互いの関係において配分されつつ、音の揺らぎに伴い意味の揺らぎを抱えつつの、音素の配列集合・記号的な単位「シーニョ」を基本単位としている。

言語論の現代的転換、関係概念としての言語的意味、記号としての言語論の提示

4．言語使用と人類：（自然―情動性）から（文化―観念性）へ

・人間の観念作用（精神運動）と発声活動（身体運動）の重合としての言語使用：

ソシュールの言語論は、近代的自我作用、個人の精神活動の表象としての言語論でありながら、レヴィ＝ストロースの、人間は「自然生物性から社会文化性への移行」の過程にあるという言説、人類の「自然生物から社会文化への移行の過程」そのものというべき言語の変換過程を示し出している。ソシュールは言語の体系の議論において、言語の体系への母国語集団的な関与、社会制度的なラングの機能、**ラングの社会的構築過程**を示し出している。

―主な論点として―

1-差異への気付き：差異だけが言語の体系における指標（メルクマール）

言語には差異しかない：私の表現での『差異への感興』『差異の二項対立関係』について「差異」とは言語外現実（生活世界）に、ある「差異」「違い」を感じとり、その感興を何だかの対比関係（二項対立）の中で顕在せしめた、あるいはその差異への解釈の形式としての「差異の二項対立関係」である。自らの生活世界の中で、ある「違い」「差異」を感じた場面において、その差異に注目、あるいは注目し指向する精神の動きは、差異を産ましめた対比関係（二項対立）の中に、その差異を括り取る精神機能の駆動態のうちに、「差異の二項対立関係」という形式をもって、人間の意識作用が記憶する。

第一の恣意性と「シーニョ」・「言語的意味」「指向対象」・その「差異」と「対立」

そうした『差異の 2 項対立関係』を、丸山の表現では「指向とは、ランガージュによる言語外現実のひとつの解釈であり『差異化です。』[1]」としていると思われる。

★（読む p 155　5 行目）「差異を用いての対立化現象」・『差異の二項対立関系』は「差異の感興」「差異への気付き」を括り出す形式（それが意識に到達する事が関与的と表現されている）

★（思想 p 155）「その対立現象を樹立するのは言語主体の意識であること」

自然生物性から社会文化性への移行の過程：

人間の意識は自身の生活世界の中で何だかの「差異」を感じる場面において、その「差異の感興」を、「差異の二項対立関係」を構成して括り出す、その差異の解釈、表現としての「言語音声」であり、「言語音」と「言語的意味（解釈）」とが一体的に絆づけたられた「音響イメージ」、その「言語音・シニフィエ（音）」と「言語的意味・シニフィアン（意味）」が一体的に絆づけられた形式である「シーニョ」を表象する。この「音」と「意味」の一体的な絆についてソシュールは「無意識からの指定」として「第一の恣意性」としている。

言語音声をもってする意味の表象の形式、その単位としての「シーニョ」（音声＋意味）であり、それを集団的に浸透し、敷衍する歴史的経過において、それを格納するという表現になるラング（言語）、そのラング（言語）の体系が母国集団的に構築されている。それは集団を取り囲む生活世界への解釈の体系として、集団的に浸透した生活世界への解釈の形式として、「差異の二項対立関係」の重合（恣意性の動きを体現した形式）というべき、母国語言語の言語的意味の配分様式としての、母国語言語（ラング）の体系が想定されている。

個々の「差異への感興」を「差異の二項対立関係」として構成する精神機能（ランガージ

[1] 丸山圭三郎　『ソシュールを読む』　P45　岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日

ュ)、その集団的な重ね合い、その言語使用の歴史経過、過程において、自らの生活世界の解釈としての「差異の二項対立関係」を、言語音の配列関係をもって自らの「解釈」を括り出す、表象するところの「シーニョ」であり、それら「差異への解釈」を格納する体系としての言語（ラング）が示される。「差異の感興」、それのみが世界を分節し、解釈するメルクマールとして、母国語言語の体系、その母国語集団的な構築過程が想定されている。

人類の「差異への感興」は、時間の差異・時間概念生成―（過去と現在、そして記憶的時間）（フロイドの潜在意識）などの謂いであろう。やがて空間の差異を、それらを知る存在へと移行する人類において、レヴィ＝ストロースが言う「自然から文化への移行過程を生きる人類」と言う規定性、その中心的営為、そうした言語使用、言語的コミュニュケーションと言えるであろう。

2．言語（ラング）の体系と「差異の感興」・その母国語集団的構築過程

ランガージュ概念・パロール概念によるラング（言語）の体系性へのアプローチ

言語の体系：人間は自らを取り巻く生活世界において、「差異の感興」「差異への気づき」を「差異の二項対立関係」として括り取る**ランガージュ**（精神機能の動態）の駆動態、その動態において、母国語集団におけるそれら「差異の感興」「言語的意味の重ね合い」としての**言語音表象（パロール）、**その重ね合わせにおいて、その渦中で括り取られる言語的な意味、その単位**「シーニョ」**を、母国語言語の体系において記憶しつつ、言語使用を重ねているとして想定されよう。

その経過、その動態は「言語の恣意性」のままに、その動きと連動する言語の体系性をもって、「シーニョ」を格納する（記憶する）のであり、その言語の体系（ラング）は、母国語集団的な社会的構築の渦中において、言語使用の経過の中で、言語使用を重ねつつの動態において構築される、そうした母国集団的な言語使用が想定される。

記憶の宝庫として集団的に構築される言語体系の構築過程と人類種の形成過程は双方向的

レヴィ＝ストロースの自然生物性から社会文化性への永遠の移行状態にある人類

※人間はそれぞれのコンテクスト（背景、状況、場面）において、ディスクールの要請をかかえ、「言語の体系」に格納されている「シーニョ（言語の意味の単位）」を選びとり、それらを連ねつつの言語表象（パロール）を進めるのだが、その実践課程において、その選ぶ精神機能（ランガージュ）の動きに連動する体系性をもって、言語（ラング）の体系として構築しつつ、パロールの実践を展開しつつあるといえよう。

※「差異の差異化現象」（丸山のソシュールの思想 p 106）・が「意識に届く」状態において、あるいは「差異の感興」が「差異の二項対立関係」において意識に届く状態において、

「差異の感興」が言語の体系性に組み入れられる→on-off の機序（二項対立）をもって大脳言語野に届く→「差異の感興」が回路（神経伝達物質の関与）づけられ、刻まれる過程を想定する。

※読む p 116　「ラング、パロールの弁証法」という表現**「ラングとパロールの作り作られる関係」、力動的動き。**「パロール」をくり出す言語使用の実践課程において、社会的に構築される「ラング」として、**偶発的なエピソードの集計でありつつ、「シーニョ」を選びとる類推（恣意・自由）作用の機序と同調するところのラングの体系性**

ソシュールは、「言語は社会的産物[2]」としているが、これは社会的構築過程という新しい現代的な概念の構成に近いと思われ、社会的産物としての言語には、言語の意味の生成、概念形成への集団の関与が想定（ラングは社会制度的 p 74）されており、それは（緊密性・必然性・あるいは文化的化石）とも表現されている。（読むの p 201）

3. 言語記号論の射程：

関係的概念としての言語の意味の無限性：記号的構成で意味を表象する形式、大脳内に神経伝達反応のルート、差異の感興のインプットの機序を想定する。

（神経伝達物質の反応・on/off）「差異の感興」・その刺激を神経伝達系の反応機序として抱える事を可能にする言語音声の記号的構成（12 対の示唆標識の配列関係）。

「シーニョ」は音素配列の集合として、無限数のバリエーションを抱え得る形式でラングに格納されている。

「差異への感興」の集団的な浸透・定着過程を蓄えつつの、母国語集団の歴史時間の経過・集団としての言語的コミュニュケーション過程（ラング・言語の体系性の構築過程を想定）

「固有の表意作用を欠くが、しかしある体系のうちにあって互いに対立し、この対立の事実そのものによって表意作用を生み出すことを可能にする単位のようなものであろう。[3]」と表現される「シーニョ」だが、その「シニフィアン（音声）」は音素集合の配列関係の差異をもって識別される、音素を単位とする記号的構成をもって、無限のバリエーションを産ましめ得る構造であり、その「音響イメージ」の差異をもって聴覚イメージを湧出する。
そうした歴史経過・過程を経た人類種であり・人類の生物種的特徴を牽引する言語使用過程、言語的コミュニュケーション行為として理解される。

---

[2] 丸山圭三郎　『ソシュールを読む』　P164　岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日

[3] ローマン・ヤコブソン『音と意味についての六章』 P 15　みすず書房　2008 年 11 月 10 日

「差異の二項対立関係」、「シーニョ間の差異の関係」において意味を配分する言語体系

（言語の母国語集団的な構築過程において、言語の意味の非実体的な価値、意味を産み出し続ける人類）

「地質学的時間の経過の中で、音声表象としての「シーニョ」の「シニフィエ（音声））」の変容を生じせしめそれを蓄積する・母国語集団的なそれらの敷衍の現段階としてのラング（言語）と理解され、その様態については（緊密性・必然性・文化的化石の変換[4]）と形容されていると思われる。」

※『ソシュールを読む』p201 文化的化石・「文化的必然」・同時に、通時/共時変換を抱える言語体系、その動き。

（**千変万化をも識別記録可能な記号的表象：言語音、音素 12 対の示差標識（弁別特性）の集合、その配列関係の差異により識別される・言語的意味の世界）その記号的構成の「シーニョ（シニフィエ）」と・それらの二項対立関係の重合体としての言語の体系**

4. 言語の二つの性質と人間の生命活動（精神運動と身体運動）

人類種のゲシュタルト：身体運動に加え、精神機能・概念化作用を抱えた人類の存在様式

恣意性 - 時空を超えて展開する意識作用→時空を超える恣意・自由な様（（精神運動）

線状性 - 一筋に時々刻々（継時的）と発音される言語音声の性質（発語運動・身体運動）

（恣意性は人間の精神運動・線状性は身体運動・双方の重合状態での言語使用）

① 言語の二つの性質（恣意性と線状性）と言語的コミュニュケーション

言語使用における話し手・聴き手双方において、

それぞれの精神・身体運動・（心的・精神機能＋身体運動発語・聴覚機能）の動態

（第一の恣意性）「シーニョ」の音と意味の絆の非自然性・自由度（意識下）

（第二の恣意性）「シーニョ」間の関係、差異の二項対立関係の自由度・非自然性（意識上）

1- **話し手側**の精神身体活動と言語の（恣意性・線状性）について

「シーニョ」の「音」と「意味」の一体な絆と言う規定性、「無意識からの指定」について、「ディスクール」あるいは観念性が発語への動因として機能するという事なのか、発語の場のコンテクスト（状況）の解釈としてのパロールの生産なのか、言語使用の始りが想定できるとすれば、コンテクスト（状況）の解釈、あるいはそのものとして想定される。

---

[4] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P164 岩波セミナーブックス２ 2009 年 3 月 13 日

言語使用の現在においてはディスクール・観念性の先行もありえるであろうか。

双方の重合状態において、ラング内の「シーニョ」を選択（**恣意性**）し、「シーニョ」を結合（**線状性**）し、パロールの連鎖を構成する。

2- **聴き手側**の精神身体活動と言語の（恣意性・線状性）について、
表象された言語音声の配列関係を時々刻々追いかけ（聴覚・身体運動・**線状性**）、その音響イメージの差異を**恣意に**聞き分けつつ、「シーニョ」の意味の連鎖を繋ぐ**（線状性）。**

聴き手・話し手双方のランガージュ駆動（線状性と恣意性の重合）、双方において恣意性と線状性の重合が（必須的）に想定される。

② 言語の意味の単位「シーニョ」と言語の体系について

ランガージュの働きにおいて駆動される言語の意味の単位「シーニョ」は、**第一の恣意性において、「シーニョ」**は「音」と「意味」の間の一体的な絆性を抱えていて、その絆は無意識からの指定とされている。（シーニョの音と意味の絆の創出）

※文節言語：文とは、意味を持つ部分にまず分けられ（第一分節、語・形態素）、その意味を持つ部分が音素という意味のない言語の最小単位（第二分節）に分けられている。数十の有限の音素から、数十万の語が形成され、語を組み合わせることによって無限の現象を文として産出できる。この性質は言語の持つ経済性（有限の素材）と創造性（無限の現象）の基礎をなす。

※第二の恣意性：「シーニョ」同志が言語の体系内に格納されているとの表現において、それら「シーニョ同士の横の関係①↔①↔①に見出される自由度・恣意性」を抱えているという表現で説明されるのが「第二の恣意性」であり、言語（ラング）の体系性が抱える性質として理解される。それは「シーニョ」がラングに格納される形式、各「シーニョ」間の格納における関係、その「恣意性」である。各シーニョ間の関係において配分される言語的な意味、母国語言語の意味の配分体系・価値体系としての言語の体系、その性質である。その自由度・恣意なる各「シーニョ」に配分される意味とその範囲、広がり方は、恣意である。

母国語言語の「各シーニョ」の格納のルールとしての体系であり、そのルール**（第二の恣意性）**によって構成されている言語の構造である。

「シーニョ」の音声（シニフィアン）は、音素の配列集合として、個々の音素の配列上のずれ込み・揺らぎをも補足可能な記号的構成であり（12 対の弁別特性の音素群）、その配列関係のズレを含めて音響的差異を醸成する「シーニョ」として、**第二の恣意性を抱えたラング**

（言語の体系）を揺らす事が想定される。

③　言語的コミュニュケーション

「シーニョ」の構成は「音」と「意味」が一体的に絆づけられた言語音声の配列集合であり、その絆は何の法則性もない自由、恣意であり、それは「第一の恣意性」とされる。この性質において、**聞き手**における音響イメージは、意味（観念・概念性・ディスクールの要請）と一体的である事、そして**話し手**においては、ディスクールの要請、あるいは言語使用の場のコンテクストの解釈において、「意味」と一体的に絆づけられている「音-言語音声」の表象過程としてのパロールの表象、その実践課程として理解される。

音素の連鎖、配列関係である「シーニョ」を、言語の体系を介在させて時々刻々・経時的（線状性）に選択及び結合をして発声、「パロール」の連鎖を連ねる、それが話し手側の言語使用であり、その音響イメージを線状的に聞き取り、その差異をイメージに繋ぐ聴き手側の言語使用、その言語的意味の授受関係・その交錯が言語的コミュニュケーションと言えよう。

※　ソシュールの思想ｐ344　ｐ87 のラングとパロールの区分けの表について

ソシュールの**パロールとラングの区分け、その**整理についての変遷がみられる。
晩年（1910～1911）には、パロールの生産活動・言表行為（選択と結合）とされる内容は、言語使用の実践課程としてのパロールにおいて、「シーニョ」の選択と結合の双方がパロールに属する機能とされ、その連動する動きが言語的意味を実現すると言う理解である。この選択と結合の母国語集団的な重合過程において、各「シーニョ」の抱える意味の範囲、その意味の配分へと至るものと思われる。従って選択と結合は不可分との解釈へと向かったのであろう。

言語使用における精神運動（観念作用・意識上）と身体運動（自然生物性・意識下）、この二つの重合状態＝（線状性と恣意性の重合）においてパロールの連鎖が構成される。（尚パロールの連鎖とはディスクールと同義であろう。）そして「第一の恣意性」の絆は「無意識からの指定」であって音と意味は何の法則性も無い自由とされている。

その絆の母国語集団的な構築過程を想定できるとすれば、人間の意識の複層性、無意識と意識と言う二項対立の中の複層性が浮かび上がる事も否定できないと思われ、長い地質学的な構築の過程を、人間精神の複層性の想定をもって考察するならば、「シーニョ」の「シニフィアン（音）」を構成する音素が選ばれて、「シーニョ」の音素順列が安定し、意味と繋がれつつ、ラングの体系に繰り入れられるところまでの経過、その人間達の心理過程は、無意識とされるのであろうが、無意識の中の複層性が想定され得るであろうか。

※丸山の思想 p 343 の「主体の意志」など「構造を乗り越える人間」「真の言表行為」という表現は、近代的な自我作用（精神運動）を前提にしての言語実践課程の考察と理解される。しかしディスクールを形成する動因については、その精神機能は意識上・下とされつつも複層的であろうと思われ、消えることのない自然生物性をベースに置きつつの、社会文化性として、その重合状態が想定されよう。

④　言語使用の中の身体運動・精神運動・意識下意識上（情動性と概念性）

言語使用における話し手・聴き手について

人間の身体活動・（身体運動発語・聴覚機能）と精神活動（精神運動意識活動・情動性・観念作用）の 2 軸は、言語の線状性と恣意性に対応する、人間の意識の 2 軸に対応（意識上・下）すると言う理解がソシュールの言語論であろう。そして人間の無意識は階層的、複層的と言えよう。

（自然生物性・意識下）と概念性（社会文化性・意識上）とを想定し、その重合を考え、自然生物性から社会文化性への移行過程・その重合過程に係わり、音声（身体運動性）と意味（概念性・精神運動性）の同時一体性・双方向的な絆としての「シーニョ」と言う構成である。その構成において無意識の中の複層構造を想定せざるを得ないと思われる。

（言語の表象は、近代的な自我作用・個人の意識内部の活動の表象、その実現と言うより、その始まりにおいては、自然生物性（情動性）を抱えた集団的・集団内主体間の相互交互作用、聞き合い、揺らし合い、重ね合うコミュニュケーション活動において、聴き手・話し手双方のランガージュの重ね合わせ、その集団的な駆動として想定される。）

それは母国語集団内個々人の意識に届くのとの表現になる状態、大脳言語野の反応として集団内に浸透、敷衍しつつ、その重合状態としてのラングの体系が醸成され形成されるというイメージにおいて、地質学的な時間経過の中で、それぞれの差異への感興、生活世界への解釈として、無意識の中の情動性・生物性が重なりつつの音声表象として想定されよう。

5・意味の単位「シーニョ」の図について

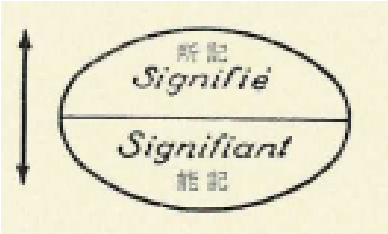
レヴィ＝ストロースに「言語は対立する記号のシステム[5]」という「ソシュールのアイデア」を伝えたヤコブソンは、彼の音韻論の講義を記した「音と意味の 6 章」において、「シーニョ」の外側に、双方向を向く矢印を示している[6]（P102,103）。

「音と意味についての 6 章」P102 の「シーニョ」の図

---

[5] 橋爪大三郎『はじめての構造主義』講談社現代新書 0898　1998 年 5 月 20 日

[6] ローマン・ヤコブソン　花輪光訳『音と意味についての 6 章』P102，103　みすず書房 2008 年 11 月 10 日



ヤコブソンの解釈において、「シーニョ」の外側に書かれた矢印は双方向を向いており、その事は音響イメージ（Signifiant シニフィアン）と意味（Signifie シニフィエ）の絆は双方向を向いており、音響イメージと言語的意味は一体的、同時発生的と言う理解を引き出すであろう。

かつ人間の言語能力（精神機能）について検討するならば、聴き手において駆動するランガージュは、音素の配列関係の差異を追跡しつつ、その差異を音響イメージに繋ぐ機能として想定され、他方の話し手においては、「シーニョ」のシニフィアン（音）は「二項対立関係」としての弁別特性を構成する 12 対の音素の配列関係として生成する。その聴き手側のバロール（言語音）あるいは「呼びかけ」からの音響イメージの醸成は、話し手の「ディスクール（言述）」の生成とは、同時発生的である事として理解される。

話し手・聴き手双方において、一つは線状性と言う発声運動上の制約関係と、二つには恣意性と言う精神運動上の自由度の重合状態において、後者は時空を超え、現前の事実に拘束されずにイメージを観念を産み出す性質に結び付くのだが、その二つの性質を抱えた身体運動と精神運動の同時駆動において、その二つの性質は人間の精神活動の二つの軸（連辞と連合）動きに重なるのだが、言語使用はその双方の重ね合わせとして、母国語集団内の複数人活動、あるいは集団的活動として、その渦としての進行を可能にすると思われる。

ソシュールの「シーニョ」の提示、図解「シーニョ」の外側の矢印の双方向性について

音から意味への矢印には①一方向 p 55（1848） p 233（1899）②双方向　の二通りあるが、
図解の多くは②双方向。①②に関するソシュールの言述：読むの p 233　、

①の一方向的（音から意味へ）な図は、言語の体系を前提にせずに、第一の恣意性の説明・（観念は音に先行して存在していない事を説明する為に示される）

②の双方向的な図は、言語の体系性を前提にして、関係的概念としての言語の意味の説明の為に示される。そして　①の第一の恣意性は②のコロラリーとして説明される

①＋②の展開が、「音」と「意味」の絆の即時的一体性、語の意味は単独では成立しない互いに固く結ばれた体系によって全体から配分されるという論点へ繋がれる

ランガージュの駆動の様態としての第一の恣意性は、コミュニュケーション過程において、意味と音の一体的な「シーニョ」の括り出し過程を説明して、「シーニョ」の音と意味の同時発生、一体性を示している。「**シーニョ」の図の外側に書かれた矢印の双方向性は、**

聴き手と話し手の双方において、互いのランガージュの同質性をも示していると思われる。

6. 音のゆらぎ（意識に届かず）・意味のゆらぎ（意識に届く）

人間の精神機能（脳機能）の恣意性・言語の記号的構成・言語的意味の創出過程

「シーニョ」の創出と言語体系の変換について（読むの p 87）

・音声のゆらぎ＝

意識の下での音声変化（非関与変化）＝変化前の伝承系は消え新形に置き換わる

・意味の揺らぎ＝

意識の上での類推的変化（関与的変化）＝変化前の伝承形と新形が共存[7]

語る主体の意識：「意識に到達する」の解釈：大脳言語野に刺激が届く

差異の感興を抱く⇒意識に届く経過・過程における、記号的構成の機能性ゆえに可能

語る主体の意識→（音声変化だけでなく）類推的変化を経過せずには意識に到達しない

類推的変化を引き起こしている時にこそ、意識に到達する

意識に到達する：on/off の機序をもって、脳の神経伝達系に届く

意識に届く・大脳神経伝達系にインプットされる・それが集団的に敷衍する

→脳容量（実体）と言う実質・身体性の変容・人類種の進化過程を牽引

官能基について：有機化合物の中にある特定の構造を持つ基で、その化合物の特徴的な反応性の原因となる原子や原子団のことである。同じ官能基を持つ化合物は共通する物理的・化学的性質を持つ。また、有機化合物の名称も、その化合物が持っている官能基をもとにしてつけられており、官能基は有機化合物の分類の方法として重要である。（東邦大学）

（関与的変化を引き起こす脳内神経伝達物質・官能基の関与を想定する）

7．バロール（シーニョの連鎖の表出過程）の実践課程が牽引する言語の体系性構築

丸山圭三郎の『ソシュールの思想』P87 の表によれば、ショシュールは晩年（1910～1911 ）、パロールとラングの機能について、その境界線の移動をしており、①物理的・生理的②精神的・心 理的③精神的宝庫という 3 区分を設定する中で、②についてラングからバロールの側に移動をしている。

『ソシュールの思想』P87 の図

[7] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P87 岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日

上記の図において、パロールの機能に注目すると、1897～1900 という中期においてはパロこの変化は、晩年のショシュールにおいて、ラングの機能としては**潜在的な精神的宝庫**として限定し、他方のバロールの機能として一つは「音素・記号・連辞及びその**結合**」に加えて、二つ目の「**選択**」を精神的実行の範疇としてラングの機能に組み入れている。

ここでバロールの活動とは言語表象側の言語音の発声活動であり、そのバロールは「シーニョ」の選択と結合を果たして発声を進めるとの理解に落ち着いたと理解される。選択とは類推作用（恣意性）をもって動き、結合は「シーニョ」間の結合として辞項の形成過程、連辞の軸による動き（線状性）と理解され、そこでパロールの動きとしては身体運動的な発声作用に加えて精神機機能（選択）の双方を組み込んで進むとの理解になろう。

それら言語表象に係わる、線状性と恣意性に係わるところ、いわば言語表象の実践課程、進行過程の総体がバロールとして纏められている。言語の二つの性質（恣意性と線状性）がソシュールによって定義され、その双方を抱えて展開する実践課程としての「バロール」、その人類の言語使用の中の焦点としての位置が示されていると思われる。

8．言語の体系の社会的構築過程

言語の体系の社会的構築過程・（話者・聴き手・集団としての言語使用）

集団内個々の動き、その集計であり、しかし偶然の積み重ねを含みつつの言語の体系性（発声し合い、聞き合い重ね合い、揺らし合う、母国語集団的なランガ―ジュの双方向的・多重的な駆動の重ね合い）、その過程において、人類集団は種として分化を形成したと思われ、その様態は現代思想における人間の意識作用・観念作用の在り様の解釈と重なる。）

（言語の体系性はディスクールの組織にかかわり、人間の精神機能が「シーニョ」の連鎖を生成するルール・定式性として、構造はそのルールによって構成される構造と理解される。）

バプチンの対話原理：「自己意識を組織する最も重要な行為は，他者の意識（汝）との関係によって規定される。」（バフチン，1988, p.250）差異と生成がバプチンの対話原理の基礎

バプチンの対話原理における自己

１．自己は他者を媒介にし、他者との関係性に深く根差す社会的存在
　「自己は単一で同一性を持つ独立した個人」に対して
２．自己が言葉を発するとは、自己のなかの他者の言葉と対話する事である。
３．「自己のなかに住みつき、内的論争をかわす他者のことば」
　「自己の発話の聴衆となる明示されない他者」
4、「コトバの対話性と多声性」バプチンの後期は、「テクスト間」の対話

この 4 の観点は、対話するのは、もはや「自己と他者」でもなければ、「内なる自己」や「内なる他者」でもない。言葉と言うものが本質的に「対話性」を持つと考えられる。言葉の対話性は、「分裂した多声性（ポリフォニー)」を持ち、「同じ一つの言葉を互いに背反し合う様々な声を通して実現する」ことになる。

※バプチン 1895 年 11 月 17 日 - 1975 年 3 月 7 日）は、ロシアの哲学者、思想家、文芸批評家、記号論者。対話理論・ポリフォニー論の創始者。記号論のタルトゥー学派の祖。

ポリフォニー性に関連して：相互テクスト性（intertextualité）とは、生起している状況（コンテクスト con-text）において決定される
※コンテクスト：あるテクストを解釈するために不可欠なさまざまなテクストの総体
〈文脈〉〈脈絡〉〈状況〉などと訳される。言語理論、文学理論、解釈学などの領域におけるキー・コンセプトの一つ。テクストは相互テクスト性（intertextualité）の作用を常に受けている。（どんなテクストもコンテクストを無視しては解釈できないという自明な原理には、所与のテクストに対するコンテクストを過不足なく限定するいかなる客観的基準もない、というパラドクスがともなう。）

この問題に言語論的「転回」をもたらしたのは、スベルベルとウィルソンの有意性理論（relevance theory. 関連性理論ともいう）彼らはグライス理論を継承しながらも、コンテクストに関する伝統的見地を転倒した。コンテクストは客観的な所与ではなくて、会話の場に自己組織されるものだという見地である」（菅野［1998：558］）
（この考え方は、ミハイル・バフチンの「対話原理（dialogisme)」や「ポリフォニー」の概念を継承するものだが、ソシュールのアナグラム研究やフロイト＝ラカンの精神分析からの刺衝も受けている）（大井［2004：339］）

状況から受け身的にコンテクストが生成するのではなく、会話の場で力動的に生成する・「意味をその物質的側面から出発して、それを忘却せずに考えるときに、言語現象が立ち現れてくる姿である。いい換えれば、言語的な意味の世界はそれを産み出した発話者や作家の主観や意図に一意的に従属するものではないとする基本的な立場が含意されている。」

http://tanemura.la.coocan.jp/re3_index/4T/te_text.html

ランガージュの重ね合い、揺らしあいといった、言語使用・言語表象過程を想定すると、言語的コミュニュケーション過程は、コンテクストを自己組織化する経過、そのものであろう。コンテクストを自己組織化するとは、「時間・空間の差異の気付き」と相関的であろう。

やまだようこ「多声テクスト間の生成的対話」：

「第 1 に，対話概念を多声テクスト間の対に拡張することである。第 2 に，差異を肯定し，必ずしも否定や対立にならない「両行」する対話を考えることである。第 3 に，一次元の時間順序による因果関係ではなく，出来事の関係性を問うていくことである。第 4 に，差異化，遅延，隔たり，断片化など空間的・時間的に「はなれる」働きと，分化，引用，リンク，トランスクルージョンなどはなれたものを「むすぶ」働きによって，「生成」機能が生まれるしくみに注目することである。」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/7/1/7_21/_pdf/-char/ja

参）質的心理学研究 第 注 7 号／2008／No.7／21-42 多声テクスト間の生成的対話とネットークモデル ―「対話的モデル生成法」の理論的基礎　やまだようこ

ドルースの生成；「対立するものを弁証的に止揚するとか、違いや差異が否定されずに排除されずに、吸収される」：やまだようこの言葉としては「ドゥルーズの『否定や排除なき差異』『差異有るものの肯定的な隔たり』の概念では、差異や隔たりは共に肯定され、差異化・分化(differentiation)として生成される。闘争、否定、排除と言う概念自体が、無化され徹底して取り除かれ得る所が興味深いのである。」と。→**生成と両行（やまだの概念）**

クリステヴァの間テクスト性・(間テクスト性は、テクストの意味を他のテクストとの関連によって見つけ出すことである。コトバンク)

一つの概念形成に係わり、複数の思考、言語使用が関与すると言う人間の意識作用が含意されていると理解できよう。

（クリステヴァは、対話を多声的に拡張した「ポリローグ」(polylogue)という新語をつくったのだが、「ポリローグ」は、①ル・セミオテック（原記号態：リズム、イントネーションなど言葉として表現されないもの）と②ル・サンポリック（記号象徴態；言語において記号・意味のレベルにあるもの）の衝突からうまれるとしている。そして詩の定義として、ことば自体を無化し、論理を崩し、「うたう」働きによって共感的に交差する先鋭的テクスト

としている。）

これは、ソシュールの言語の線状性と恣意性の衝突とも取れ得る、言語表象過程そのものであり、「シーニョ」という一つの言語的意味、観念性、概念性形成過程のあり様、その蓄積、母国語集団的な言語の体系の構築過程、人間の社会文化性を背負った、母国語体系の社会的構築過程に重なると考えられる。

デリダの差延・「意味のあるところには、つねにすでに、他への参照、あるいは、他による媒介が働いている。そして、そこで不在の形で介在する他のものは、しかし、あくまでも、その記号とは異なるものである限りで、その記号自身によってはコントロールできないものであることから、そうした根源的な媒介性の関係、基本的な差異化の運動には、必然的にずれと遅れが孕まれざるを得ない。（ウィキペディア）」

（意味の生成過程への、「ずれと遅れ」差延を孕むと言う規定性には、言語の意味生成過程は、母国語集団内の意味生成過程に於ける「ずれと遅れ」・多様な思考、揺らぎを抱えた言語の意味の生成過程、コミュニュケーション過程、ランガージュの重ね合いを含意する。）

※ソシュールはアナグラムの技法は、言語の線状性の破壊によって、複数の話者の声を響かせるとしているのだが、アナグラムにおける「テーマ語」を構成する音素が一定の規則性をもって散りばめられていると理解できるとすれば、そのポリフォニー性をもって、経過する時間、やがてテーマ語へと収斂すると言った経過は、「シーニョ」の生成過程に重なりうるとも想像され得ると思われる。マヌカン（アナグラムの聞き取れる範囲をしるす、テーマ語の後藤と語末の音節に囲まれた部分）を抱えている文章、その中のテーマ語が聞き取られることができる、その音響について、ソシュールはアナグラムとして検討をしている。

※**マヌカン**：アナグラムの存在の指標として、「主題語・テーマ語」の語頭と語末の音節を両端にもつ 「マヌカン(mannequin)」ないし「主座（locus princeps)」と呼ばれる部分が埋め込まれるとされる。

アナグラムとは、あるいは意味の生成過程について、集団的な関与について、時間軸を入れて眺める事ができる、そうした想定も可能であろうか。..

レビナスは、他者が自己に先立って痕跡を残していることを主張し、それは「けっして現在でなかったような過去」に生起するものであるとする。これら複数の意識活動の総合として、言語的意味の生成過程と重なるであろうか。..

★フランス現代思想の差異、差延、移行等は、言語表象、ディスクールの生成過程を、その時間性を入れて考察しようとする視点と重なり合うのではないだろうか。これらは人類における言語使用の母国語集団的な蓄積過程、いわば言語の社会的構築過程、おそらくは人類

種の、ホモサピエンスへの種的分化の過程を促した言語使用の集団的蓄積、集団的敷衍、やがてはその身体性、現前の事実としての身体機能、大脳の神経伝達系の生成と構造化、容量肥大へと向かう、言語使用の時間性、そしてその場の力動への考察と重なり合うと思われる。

結句

「差異の感興」を脳内に刻みつつ、それを記憶する言語の意味の単位「シーニョ」、それらを記憶する機序としてのラング（言語）の「群化」の構造、それを抱えたラングの体系性、その構造を生成し観念性を積み重ね生成発展させた生物種が人類といえよう。ソシュールの言語論は、ラング（言語）の体系の社会的構築過程を想定している。

音声言語の音的構成単位、その基本単位は音素であり、その音素の示差標識の配列関係の差異をもって、音響イメージの差異のバリエーションを生じる、(音素の 12 対の示差標識）の配列関係の効果・その（on/off の構成）・記号的構成をもって神経伝達系へ、脳機能に刻み得る構成としての言語記号であろう。

音素の弁別特性の効果、音声言語の故をもって、人類は大脳機能に「差異の感興」を「差異の二項対立関係」として、on-off の形式をもって刻み込んだところの生物種と言えよう。

自然生物性（自己維持と自己再生産）を持続させつつの社会文化性へ移行であり、言語的コミュニュケーションは社会文化性への移行のエンジンとして機能していると思われ、**聞き合い、重ね合い、揺らし合い、音声表象の集団的積み重ねあい、ランガージュの母国語集団的（個人を超えた集合的）な重ね合い・双方向集団的駆動の中において、言語の体系の構築過程が経過し得ると思われた。**言語の母国語集団的構築過程がイメージされ、ソシュールにおいて、言語の体系性についてを「文化的化石[8]」と言う表現に至りせしめたと理解される。

文字の創造・使用は、言語的コミュニュケーションの実践課程、その時間的・空間的制約を破るものであり、人類の文明化を飛躍的に進めていると思われる。言語は、各母国語集団による、それぞれの生活世界への解釈として、言語的意味は配分されつつ、言語的意味と言語世界を構築しつつある。

「『ことば』というものが本質的に『対話性』をもつと考えられるのである。ことばの対話性は，『分裂した多声ポリフォニー性』をもち，同じ一つの言葉を互いに背反し合う様々な声を通して実現する」と言うやまだようこの指摘である。

「自己意識を組織する最も重要な行為は，他者の意識（汝）との関係によって規定される。」

[8] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P201 岩波セミナーブックス 2 2009 年 3 月 13 日

「『ことば』というものが本質的に『対話性』をもつと考えられる」と言うバプチンの指摘である。

集団的に浸透、敷衍した、人間集団の観念作用の表象の形式、各母国語集団における生活世界を「差異の二項対立関係」の形式で解釈し合う、集団的な営為、その現段階としての、各母国語の体系であろうと思われる。(2022/0807)